人口減少対策等調査特別委員会　行政視察調査報告書

1　視 察 日　　平成30年7月11日（水）～12日（木）

2　視 察 先　　〇徳島県神山町NPO法人グリーンバレー

テ ー マ　　神山のまちづくりと創造的過疎について

〇岡山県奈義町

人口減少対策の取組みについて

人口減少対策における芸術文化の果たす役割

3　視 察 者　　委 員 長　　井 垣 文 博

副委員長　　関 貫 久仁郎

委　　員　　青 山 憲 司

委　　員　　上 田 伴 子

委　　員　　岡 本 昭 治

委　　員　　竹 中　　理

委　　員　　田 中 藤一郎

委　　員　　福 田 嗣 久

当　　局　　土生田　　哉（政策調整部長）

議会事務局　　前 田 靖 子

項　　目	神　山　町	奈　義　町
市の概要		
市町制施行	昭和30年3月31日	昭和30年2月1日
人口	5,300 人	5,906 人
世帯数	2,156 世帯	1,978 世帯
面積	173.30 k㎡	69.52 k㎡
産業別就業人口	2,667 人	3,209 人
第1次産業	860 (32.3%)	557 (17.6%)
第2次産業	491 (18.5%)	674 (21.3%)
第3次産業	1,309 (49.2%)	1,934 (61.1%)
分類不能	7 (－ %)	44 (－ %)
予算規模	千円	千円
一般会計(H30)	4,419,000	4,412,000
特別会計(H30)	(4) 2,257,982	(9) 2,072,400
企業会計(H30)		(2) 395,755
実質公債費比率(H28)	2.6 %	4.1 %
財政力指数(H28)	0.21	0.29
経常収支比率(H28)	75.7 %	70.6 %
地方債残高(H28)	3,012 百万円	3,447 百万円

＊人口、世帯数、産業別就業人口は、平成27年国勢調査の数字。

≪ 神山町　NPO 法人グリーンバレー≫

徳島県中山間部の人口 5,300 人の小さな農村である神山町。ここには IT・デザイン・映像関連企業など 16 社がサテライトオフィスを置くほか、アーティストや起業家が多数移住してきている。移住者たちのクリエイティブな発想が地場産業である農業にも刺激を与え、新しいビジネスやサービスが生まれ、地域内で経済がゆっくりと回り始めている。地方創生に携わる者で、神山町の名を知らない者はいない。

神山町の発展を 20 数年の長きにわたり牽引してきたのは、NPO 法人グリーンバレーである。理事長の大南信也氏は、1970 年台後半にスタンフォード大学大学院に留学してシリコンバレーの空気に触れ、神山町に帰郷して地域づくりを始めた。「神山は何もない町ですが、シリコンバレーのようにクリエイティブな人たちが集まれば、何か新しいことが起こるのではないかと考えました」と振り返る。

神山町を表す言葉として知られる〈創造的過疎〉は、大南氏が 2007 年に作った造語だ。過疎化の現状を受入れ、過疎の中身を改善する。若者や創造的な人材を誘致し、人口構成の健全化を図り、多様な働き方が可能なビジネスの場としての価値を高めることで、農林業だけに頼らない、持続可能な地域を目指すというコンセプトである。

日本の過疎地における一番の問題は、雇用がない、仕事がないことだ。であれば、仕事を持った人、仕事を創り出す人を集めれば、問題は解決する。神山町では現在、『ワークインレジデンス（仕事を持った移住者の誘致）』、『サテライトオフィス（場所を選ばない企業の誘致）』などのプロジェクトに力を入れている。

日本の田舎をステキに変える！　サテライトオフィスプロジェクト

事例の概要

神山町では、平成22年10月から集落内の古民家を都市のＩＣＴ企業等に貸し出す「サテライトオフィスプロジェクト」を開始した。
NPO 法人グリーンバレーは、サテライトオフィスの社員に対する生活支援や、地域での受け入れ体制の構築に取り組み、平成30年２月現在、神山町内に情報サービス企業など16 社（県外から12社、県内から４社）が展開している。サテライトオフィスの進出は、町内全域に整備された光回線による高速インターネット環境を利用すること
で、「いつでも、どこでも自由に仕事ができる」次世代ワークスタイルを実現するとともに、地元での雇用も創出することとなった。進出企業は、町内企業との協業、地域のお祭りをはじめとした集落活動への参加、町の魅力発信などを行うことで、まちづくりにも貢献している。また、このような新しい働き方の具現化は、子どもたちに「故郷から出て行かなくても働くことができる」という大きな希望を与えることにも繋がっている。

平成23年過疎の町に起こった「２つの異変」（①平成23年度の社会動態人口がプラスに②相次ぐサテライトオフィスの開20年あまりの地域づくり活動の蓄積がある。

神山町は、地元の小学校に所蔵されていた「青い目の人形」という地元の資源に着目し、その送り主探しから、国際交流へ発展させ、さらに、国内外からの芸術家の滞在を促しながら、神山という場の価値を高める試みを続けてきた。平成16年にNPO 法人グリーンバレーが設立され、町から移住交流支援センターを受託するとともに、ウェブサイト「イン神山」での情報発信が展開された。神山町への移住需要が顕在化し、古民家や空き店舗再生のプロジェクトを通して集ったアーティストやクリエーター、建築家など多彩な顔ぶれとの縁が、さらに新たな人を呼び、時代の先を農村に取り込む気風を産み出してきたと言える。

「人が集まれば自然と何かが生まれる。変化を産み出す場づくりが大事。」とサテライトオフィスは単なる企業誘致ではなく、広がりをもった人材誘致と捉えている。移住促進策として、地域にとって必要となる働き手や起業家を逆指名した誘致や、「神山塾」のような地域おこし活動による若手の人材育成の取組に繋がり、結果として雇用の創出に至っている。NPO 法人グリーンバレーとしては、将来的には地域の根幹にある農林業再生に向けた担い手育成も視野に入れている。

神山町におけるNPO 法人グリーンバレーを中心としたサテライトオフィスの企業や移住者の受け入れは、あくまで人口構成の健全化を図る手段と位置付けられており、新たなワークスタイルを実現する場として、外部の力を受け入れながら地域再生の新たなモデルを示す点が高く評価される。
特定非営利活動法人グリーンバレーのみなさん無線ＬＡＮを使って、川原で仕事をする社員。リフレッシュしながら創造的な仕事ができる。
えんがわオフィス（株プラットイーズ）では、地域住民等を交えた交流会が盛んに開催されている。

Sansan（株）のオフィスでは、神山町の光回線を使い、ミーティングはSkype（無料のインターネット電話サービス）のビデオ通話機能や社内Twitter（短文を投稿できる情報サービス）を使用、東京オフィスと全く同じ開発環境を実現している。

≪視察を終えて≫

視察１日目は、徳島県中山間部の人口 5,300 人の小さな農村である神山町を訪れました。神山町は、相次ぐ IT 企業のサテライトオフィス開設で全国的に注目されています。渓谷に沿って走るバスの中で、このような山の中に何故 IT 企業が進出しているのだろうか？何故アーティストが移住してきているのか？神山町でどんなまちづくりが行われているのか不思議な気持ちでありました。

私たちは、神山町のまちづくりの中心的な役割を果たしている NPO 法人グリーンバレーを訪問し、竹内事務局長からその取り組みについて説明を受けました。当日は新潟県加茂市議会や筑波大学生の皆さんと合同で説明を受け、その注目度の高さがうかがわれました。

「創造的過疎」、「過疎の町をクリエイティブなまちに変えよう」、「日本の田舎をステキに変える」、これらの思いが詰まったグリーンバレーの神山プロジェクトが山の中の小さなまちを変えていきます。

活動のスタートは、27 年前、地元の小学校に所蔵されていた、1927 年に米国から日本に送られた友好親善人形「青い目の人形」の送り主探しから始まった。

地域に残されていた「青い目の人形」に着目し、その送り主探しというアイデアからそれを国際交流に発展させ、国内外から芸術家の滞在を促し、その交流を通して人をつなげ、人の輪を広げ、多彩な人材を呼び込むことに成功している神山プロジェクトであった。

竹内事務局長の説明から、このプロジェクトが成功しているヒントがいくつかあった。

それは、「人をつなげ、人の輪を広げる」、「神山は面白いから人が入ってくる」、「神山はあがりが無いすごろくみたいだ」、「人が来たらうれしいが、去る人は追わない」、「協力的なところには人が入ってくる」、「アイデアを破壊する人、アイデアキラーを無くす」、「やったらええんと違う」、「外国人を受け入れる文化、よそ者を受け入れる文化がある」などです。

小さなまちではあるが、アイデアを豊富に持ったリーダーがいて、周りにそのアイデアに共鳴する地域の人々と環境がある。そしてその活動の中心にはアートがある。
同じアートでも、神山のアートと豊岡のアートは行政の関わり方ひとつとっても大きく

違う。しかしながら、各地域で行われている地域活性化の取組みで成果が上がっている多くにアートが関わっていると感じている。
神山町においても、芸術家の招聘の中から様々な人々の輪が広がってくる。芸術が人をひきつけ、そこに住んでいる人たちを変えていく。アートにはそういう大きな「力」があるのではと感じる。

【NPO 法人グリーンバレーの事務所前で】

翌日現地視察した、奈義町の現代美術館の館長が「アートは宇宙みたいなもので、我々人間のあらゆる部分に影響を与えている」と説明をされたが、神山の活動の中にアートがあり、そのアートの大きな力が今日の神山を作る基盤になっているのではと思う。この神山町の取組みから、アートの持つ力を改めて感じた視察であった。

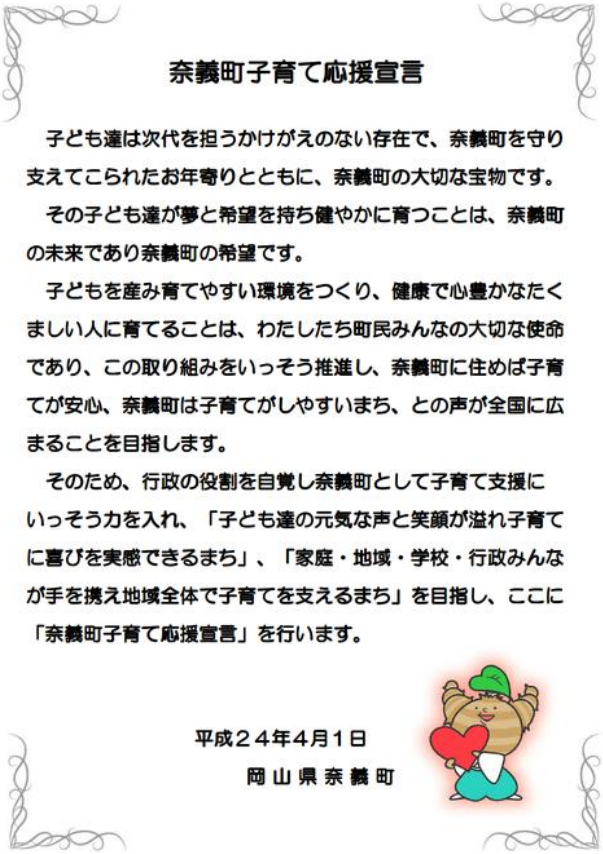
≪岡山県　奈義町≫

岡山県の北東部、中国山地の秀峰「那岐山」の南麓に広がる奈義町は、四季折々の美しい自然に恵まれた町である。昭和 30 年に３村が合併し誕生してから半世紀の間、自衛隊誘致をはじめ、農林業環境整備、工業団地整備、小中学校や現代美術館等の教育文化施設の整備、また光ファイバー網を利用しての超高速ブロードバンド通信の整備など小さな町が大きく躍進してきた。地方分権推進計画により全国で市町村合併が進む中、平成 14 年に本町は「合併をしない」ことを選択し、さらに、これからの地方自治体には、地域主権改革や地方分権の推進により、自主自立を高めた行財政運営が求められている。また平成 24 年度には、子どもたちが夢と希望を持ち、健やかに育てる環境づくりをめざして「子育て応援宣言」を行った。

また、地域の観光や産業振興の発展へ向けた取り組みとして、本町の恵まれた自然環境を生かし、農村と都市との交流拠点として那岐山の裾野に整備した「那岐山麓山の駅」は、滞在型のリゾートスポットとして地域活性化の基盤となった。美しい景観と緑に囲まれた同施設内にある山野草公園では、那岐山麓一帯に自生する貴重な山野草を保護しており、公園内を一望できる天空橋からの眺めは、心が癒される最高の空間である。このかけがえの無い資源を大切にし、いつまでも後世に伝えていきたいものである。文化面では、江戸時代後期から伝わる伝統芸能の横仙歌舞伎（岡山県重要無形民俗文化財）を保存伝承し、四季に定期公演を行うなど地域の歴史や伝統を大切にし、芸術文化活動へも取り組んでいる。

このようなかけがえのない資源を大切にし、後世に伝えていくとともに、進行する少子高齢化や人口減少問題等に立ち向かい、「活力と笑顔があふれるまちづくり」の実現をめざしている。

奈義町子育て応援宣言について



奈義町子育て応援宣言

子ども達は次代を担うかけがえのない存在で、奈義町を守り支えてこられたお年寄りとともに、奈義町の大切な宝物です。

その子ども達が夢と希望を持ち健やかに育つことは、奈義町の未来であり奈義町の希望です。

子どもを産み育てやすい環境をつくり、健康で心豊かなたくましい人に育てることは、わたしたち町民みんなの大切な使命であり、この取り組みをいっそう推進し、奈義町に住めば子育てが安心、奈義町は子育てがしやすいまち、との声が全国に広まることを目指します。

そのため、行政の役割を自覚し奈義町として子育て支援にいっそう力を入れ、「子ども達の元気な声と笑顔が溢れ子育てに喜びを実感できるまち」、「家庭・地域・学校・行政みんなが手を携え地域全体で子育てを支えるまち」を目指し、ここに「奈義町子育て応援宣言」を行います。

平成２４年４月１日

岡山県奈義町

子どもたちが夢と希望を持ち、健やかに育てる環境づくりを目指して子育て応援宣言を行った。奈義町では、子育て支援として、乳幼児・児童生徒の医療費無料化や法定外ワクチン接種補助、チャイルドホームや放課後児童クラブなど様々な施策を行っている。
今後、更に子育て制度を充実させるために「奈義町子育て応援宣言」を掲げ、「子育てするなら奈義町」と言われ、若者定住でき、安心して産み育てられるまちづくりを目指していく。

奈義町独自の施策

在宅育児支援手当

満７カ月児から満４歳（満４歳になった後の最初の３月 31１日までの）児童で保育園等に入園していない児童を養育している方に、児童一人につき月額１万円を支給。

高等学校等就学支援

生徒一人当たり年額９万円を在学中の３年間、毎年度支給。

医療費を高校生まで無料化

18 歳まで、医療機関等での自己負担分を奈義町が負担。

出産祝い金交付

お子様のご誕生に際して、10～40 万円を交付。

ワクチン接種

予防接種法に定められた BCG（結核）、DPT-IPV(4 混：百日咳・ジフテリア・破傷風・ポリオ）、DT(2 混：ジフテリア・破傷風)、MR(麻しん・風しん)、小児肺炎球菌、ヒブ、

子宮頸がん、水痘を無料で接種できる他にも、次の３つの法定外予防接種も奈義町で全額助成。

ロタウイルスワクチン

ロタウイルスによる下痢症等を予防するワクチン。

B 型肝炎ワクチン

肝硬変や肝臓癌に進展するおそれのある B 型肝炎のワクチン。

おたふくかぜワクチン

おたふくかぜを予防するためのワクチン。

不妊治療助成

奈義町に１年以上住所を有した戸籍上の夫婦で、県指定の医療機関で特定不妊治療を受けた方に、費用の２分の１以内で、年 20 万円を限度に通年５年間助成。

不育治療助成

法律上の婚姻をして１年以上の夫婦で、奈義町に住所を有しており、(社)日本生殖医学会が認定した生殖医療専門医が所属する医療機関で不育治療を受けた方に、年 30 万円を限度に通年５年間支給。

妊娠したら

母子手帳

妊娠中から赤ちゃんの小学校入学までの成長を記入できる。大きくなっても、予防接種の記録や、ママの思いや赤ちゃんの成長の記録が刻まれる手帳です。

母子保健ガイド

母子手帳配布時に、健診の無料券を配布しており、妊娠中の健診（一般検診 14 回・血液検査２回・超音波４回・クラミジア抗原検査）・GBS(B 郡溶血性レンサ球菌検査）・乳児健診２回・新生児聴覚検査が、県内の医療機関で無料で受けられる。ただし、乳児健診券は赤ちゃんが１歳になるまでしか使用できない。目安として、１ヶ月健診と生後８～12 ヶ月の間に受診のこと。
３～５ヶ月の赤ちゃんは町で乳児健診を無料で行う。

里帰り出産

県外での健診受診は一旦自己負担となるが、受診後６カ月以内に保健相談センターで申請を行えば、岡山県の基準額までの返金ができる。申請には領収書、明細書が必要。

出産育児一時金受領委任払制度

通常加入する健康保険から出産一時金 42 万円が出産後申請により支給されるが、あらかじめ加入健康保険で手続きを行うことにより、出産にかかる費用を健康保険から直接医療機関に支払う制度。詳細は、奈義町役場税務住民課へ。

赤ちゃんが生まれたら

出生届

赤ちゃんが生まれた日から 14 日以内に提出。提出先は、住所地か本籍地、または出生地の市町村でできる。

健康診査

奈義町では生後３～５ヶ月児対象の乳児健診を実施しており、内科健診のほか、保健指導・栄養指導・ブックスタート（絵本のプレゼント）も実施。
対象となる方には、１ヶ月前に通知。

乳児健診後も、以下の内容で健康診査を実施。

- １歳６ヶ月：保健指導・栄養指導・内科、歯科検診
- ２歳６ヶ月：保健指導・歯科検診・発達相談
- ３歳６ヶ月：保健指導・栄養指導・内科、歯科検診・発達相談

フッ素塗布

奈義町では就学前までの乳幼児を対象に、毎月無料で虫歯予防に効果のあるフッ素塗布を実施。かわいい歯が４本生えてきたら塗布できる。

チャイルドシート・ベビーベッド貸し出し（社会福祉協議会（TEL：36-8811）で貸し出し）

品名	利用料金（月額）
チャイルドシート	100 円
ジュニアシート	100 円
ベビーカー	100 円
ベビーベッド	100 円

なぎチャイルドホーム

乳幼児を持つ子育て中の親子が集える常設広場、つどいの広場「ちゅくしんぼ」を週５日(月～金、10 時 00 分～15 時 00 分)開設。

よちよち広場

生後３ヶ月～18 ヶ月までの乳幼児を持つ保護者を対象とした広場、月に１度、お母さんの勉強の場となっている。

一時保育

週３回以内、または月 12 回以内で満１歳から４歳未満までの健康なお子さんを預けることが可能。（午前８時 30 分～午後５時 00 分）幼児一人あたり１日 1,800 円。

子育てサポートスマイル

なぎチャイルドホームにて一人あたり１時間 300 円で、町内在住の子育て中の先輩ママや子育てを応援してくださる方たちが子供をみてくれる。（午前８時 30 分～午後５時 00 分）

親子クラブ

奈義町では０歳～就学前の乳幼児とその保護者を対象に３つの親子クラブと１つの自主クラブがある。

手当や医療費助成・給付について

児童手当

中学校卒業まで（15 歳の誕生日後の最初の３月 31 日まで）の児童を養育している方に対し、手当を支給する制度。

保育園・幼稚園のこと

保育園

「心身ともに健やかな子ども」を保育目標として、生後６カ月から児童の受け入れ。

幼稚園

中央東幼稚園、滝川つくし幼稚園の２園があります。
「豊かな心をもち、生き生きと活動する子どもを育てる」を教育目標に４、５歳児の教育をおこなっている。

預かり保育

幼稚園の園児は、降園時から午後６時まで、児童を預けることができる。
利用料金は園児一人あたり月額6,000円（利用日数が10日未満の場合は日額300円）。
同一世帯で二人以上の利用がある場合、二人目は利用料金の50%を減額し、三人目以降は無料。

保育料多子軽減

保育料の多子軽減策を実施。（対象の子どもの数は同一世帯の18歳から保育園児までを数え、第２子半額、第３子以降は免除。

その他

放課後児童クラブ

奈義小学校の児童を対象に、放課後から午後６時まで、児童を預けることができる。

やすらぎ福祉年金交付

中学３年生までの子供を養育しているひとり親に対し、年額５万４千円を交付。第２子以降で１人ごとに２万７千円を加算。

≪視察を終えて≫

視察二日目は、岡山県北東部にある奈義町を訪問。津山市、美作市が隣接する小さな町だ。奈義町が発足された昭和30年には、人口8,925人であったが平成30年現在は6,000人弱となっている。当市と同じように人口減少・少子高齢化に悩む地だ。人口減少・少子高齢化を危惧し、定住促進のための

・住宅施策
・就労場所の確保施策
・子育て支援施策

に注力し、平成24年には「子育て応援宣言のまち」として打ち出し、前記の施策の効

【奈義町議会議長あいさつ】

果であるのか、平成 26 年には同町の合計特殊出生率が 2.81 となっている。当市の 1.82 の比ではない。

「今後も現在の人口 6,000 人を維持し、町の活力と産業の力を保つ」を目標とし、

・子育て家庭への経済的負担軽減

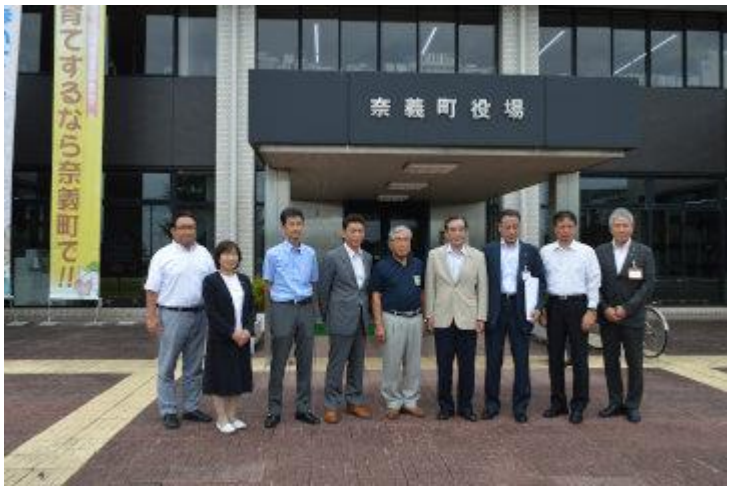
・出産、子育てと働き方への支援

・快適な保育環境の整備や家庭内教育への支援

その他７項目を挙げ、着実に実行するとされている。項目的には当市のそれとも遜色は無いと感じられるが、特に子育て支援に関する内容は町単独事業で、手厚い内容を実施されている。高校卒業までの医療費無料、中３までの子供を持つひとり親への福祉年金交付事業、在宅育児支援手当交付事業、高校等就学支援金交付事業、出産祝金交付事業、各種予防接種費用助成、その他色々と、子育に対し手厚い施策を実施されている。

当市の見解の一つとして、医療費無料化により子供の数は増えないとしているが、行政に対する子育て世代の目は、安心して子育てができると言う事を見ている。医療費無料化が子どもの数を増やすと言う事に直接的な要因につながらないかも知れないが、無料化されていないことは、安心して子育てができると言う気持ちを阻害している要因にはなっていると感じた。人口減少を緩和、阻止するには、適齢カップルに対し、これでもか、これでもかと出来うる限りの支援をしなければならない時代となっているかもしれない。

人口 6,000 人　一般会計歳入 44 億円ほどの奈義町がこのような手厚い子育て支援ができている。平成の合併もせず、コンパクトな町としてあるからなのか、自衛隊の演習所を提供している町だからできているのかは、解することはできないが、奈義町の人口減少問題に対しての意気込みの強さを大きく感じられた視察であった。



【奈義町役場の前で】